

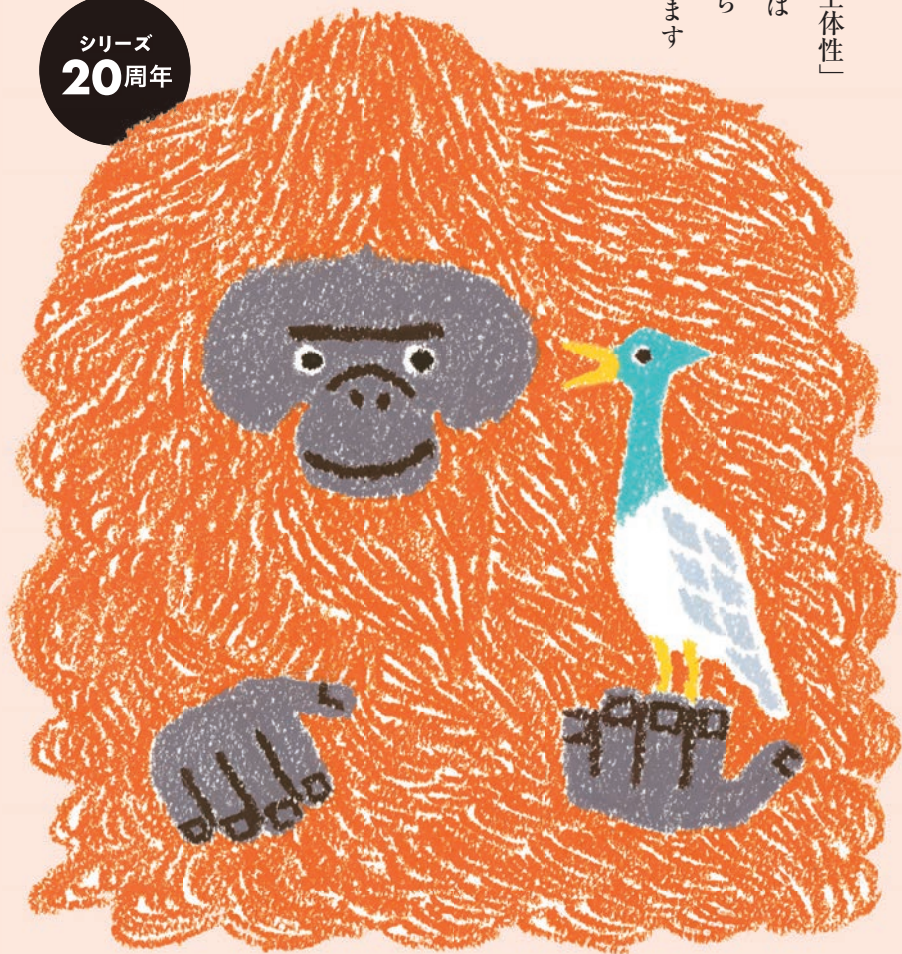


シリーズ ケアをひろく

第73回 毎日出版文化賞〈企画部門〉受賞

シリーズ
20周年

「科学性」「専門性」「主体性」
といったことばだけでは
語りきれない地点から
《ケア》の世界を探ります



医学書院

やってくる

郡司ペギオ幸夫

4

食べることと出すこと

頭木弘樹

5

「脳コワさん」支援ガイド

鈴木大介

6

誤作動する脳

樋口直美

7

居るのはつらいよ

ケアとセラピーについての覚書

東畑開人

8

在宅無限大

訪問看護師がみた生と死

村上靖彦

9

異なり記念日

齋藤陽道

10

どもる体

伊藤亜紗

11

中動態の世界

意志と責任の考古学

國分功一郎

12

介護するからだ

細馬宏通

13

漢方水先案内

医学の東へ

津田篤太郎

14

クレイジー・イン・ジャパン

べてるの家のエスノグラフィ〔DVD付〕

中村かれん

15

カウンセラーは何を見ているか

信田さよ子

16

坂口恭平 躁鬱日記

坂口恭平

17

摘便とお花見

看護の語りの現象学

村上靖彦

18

当事者研究の研究

石原孝二 編

19

弱いロボット

岡田美智男

20

ソロニーユの森

田村尚子

21

驚きの介護民俗学

六車由実

六車由実

22

その後の不自由

「嵐」のあとを生きたる人たち

上岡陽江 十大嶋栄子

23

リハビリの夜

熊谷晋一郎

24

逝かない身体 A L S 的日常生活を生きる

川口有美子……………25

技法以前 べてるの家のつくりかた

向谷地生良……………26

コーダの世界 手話の文化と声の文化

澁谷智子……………27

ニーズ中心の福祉社会へ

当事者主権の次世代福祉戦略

上野千鶴子・中西正司 編……………28

発達障害当事者研究

ゆっくりしていぬいにつなごう

綾屋紗月・熊谷晋一郎……………29

こんなとき私はどうしてきたか

中井久夫……………30

ケアってなんだろう

小澤 勲 編著……………31

べてるの家の「当事者研究」

浦河べてるの家……………32

A L S 不働の身体と息する機械

立岩真也……………33

死と身体 コミュニケーションの磁場

内田 樹……………34

見えないものと見えるもの

社交とアシストの障害学

石川 准……………35

物語としてのケア

ナラティブ・アプローチの世界へ

野口裕二……………36

べてるの家の「非」援助論

そのままがいいと思えるための25章

浦河べてるの家……………37

病んだ家族、散乱した室内

援助者にとつての不全感と困惑について

春日武彦……………38

あなたの知らない「家族」

遺された者の口からこぼれ落ちる13の物語

柳原清子……………39

感情と看護

人とのかわりを職業とすることの意味

武井麻子……………40

気持ちのいい看護

宮子あずさ……………41

ケア学 越境するケアへ

広井良典……………42

表紙イラスト……………祖敷大輔

デザイン……………松田行正・杉本聖士

やってくる

郡司ペギオ幸夫

「日常を支える人々」に捧げるアメイジングな思考！

生ハムメロンはなぜ美味しいのか？ 対話という行為がなぜ破天荒なのか？——私たちの「現実」は、既にあるものの組み合わせではなく、外部からやってくるものによつてギリギリ実現されている。だから日々の生活は、何かを為すためのスタート地点ではない。それこそが奇跡的な達成であり、体を張って実現すべきものなんだ！ ケアという「小さき行為」の奥底に眠る過激な思想を、素手で取り出してみせる郡司氏。その圧倒的に優しい知性。



A5 頁312 2020年
定価：本体2,000円＋税
[ISBN978-4-260-04273-4]

● 印象的な一節

そのとき、たまたま足の両親指の爪がこすり合いました。「これだ」と直感した私は、ひたすら親指の爪に意識を集中させ、親指の爪を向かい合わせにすり合わせ続けました。

▼ p.137

著者

郡司ペギオ幸夫 氏

からのメッセージ



NHKの「大アマゾン・第4週」の最後、密林奥地に住み独自の言語を話すイゾラドと呼ばれる裸族に、取材班はこう聞きます「あなたたちは、幸せなのか」。イゾラドは答えます「幸せは、わからない」。松田龍平の抑制のきいたナレーションを、私は何度も何度も声に出して真似しています。「あなたたちは、怖い」、「幸せは、わからない」。そのたびに、「幸せは、わからない」は脱色され、わからないではないだろう何か、 「やってくる」のです。

食べるこめめ出すこめ

頭木弘樹

食べて出せばOKだ！（けど、それが難しい……）

「人間なんてしよせん食べて出すだけ」。なるほど。ではそれができなくなったらどうする——潰瘍性大腸炎という難病に襲われた著者は、食事と排泄という「当たり前」が当たり前でなくなつた。高カロリー輸液でも癒やせない顎や舌の飢餓感とは？ ヨーグルトが口腔内で爆発するとは？ 茫然と便の海に立っているときに看護師から雑巾を手渡された気分は？ 切実さの狭間に漂う不思議なユーモアが、何が「ケア」なのかを教えてくれる。



A5 頁328 2020年
定価：本体2,000円＋税
[ISBN978-4-260-04288-8]

● 印象的な一節

長く絶食して、何も味わわずにいると、舌は鈍感どんかんになるだろうと思っていた。使わないでいると、すぐに筋肉が衰おとろえてしまうように。ところが、不思議なことに、舌は逆だった。

▼ p.50

著者
頭木弘樹氏
からのメッセージ



書くのに五年もかかりました。「経験とは、痛切になればなるほど、明瞭なかたちで表現しにくくなるものなのである」（ハロルド・ピンター）ということを実感しました。でも一方で、「人は体験を語るうち、自分でも思いがけない発見をするものなのだ」（スタッツ・ターケル）ということも実感しました。食べて出すという「普通」を失うと、その人はいったいどんな非常を生きることになるのか、のぞいてみていただければ幸いです。

「脳コワさん」支援ガイド

鈴木大介

「脳がコワれた」僕らから、すべての援助者へ

会話がうまくできない、雑踏が歩けない、突然キレる、すぐに疲れる……。病名や受傷経緯は違っていても、結局みんな「脳の情報処理」で苦しんでいる。高次脳機能障害の人も、発達障害の人も、認知症の人も、うつの人も、脳が「楽」になれば見えている世界が変わる。それが最高の治療であり、ケアであり、リハビリだ。疾患ごとの〈違い〉に着目する医学十（同じ）困りごとに着目する当事者学Ⅱ「楽になる」を支える超実践的ガイド！



A5 頁226 2020年
定価：本体2,000円＋税
[ISBN978-4-260-04234-5]

● 印象的な一節

病院を一步出た外に広がる当たり前の日常生活は、膨大な情報や雑音、予測しない突発事態が入り乱れる「情報の乱気流」環境でした。



著者

鈴木大介氏

からのメッセージ

支援がなければ信じがたいほど当たり前のことができない、けれどほんの小さな（適切な）手助けがあれば一気にやれることが増える。これが僕ら（病名・診断名にかかわらず、脳という情報処理器官に不具合がある当事者）に最大の共通点です。でもこの「適切な」が本当に分かりづらい！ので、平易な言語化を尽くしてみました。当事者を理解できないことに無力感を抱える「真摯な援助職さんたち」にこの一冊をお贈りします。

誤作動する脳

樋口直美

「幻が消えたときに、幻とわかる。——脳の中からの鮮やかな現場報告！」

「時間という一本のロープにたくさんの写真がぶら下がっている。それをたぐり寄せて思い出をつかもうとしても、私にはそのロープがない」——たとえば〈記憶障害〉という医学用語にこのリアリティはありません。ケアの拠り所となるのは、体験した世界を正確に表現したこうした言葉ではないでしょうか。本書は、「レビー」小体型認知症」と診断された女性が、幻視、幻臭、幻聴など五感の変調を抱えながら達成した圧倒的な当事者研究です。



A5 頁260 2020年
定価：本体2,000円＋税
[ISBN978-4-260-04206-2]

● 印象的な一節

私が時間を見失っても、草花や木々は覚えていて、黙って毎日告げてくれます。それならこのままでいいやと思いつつ、私は春の風のなかを歩いていました。

▼ p.104

著者
樋口直美氏
からのメッセージ



これは闘病記ではありません。病気になり、数え切れないほどの不可思議な症状を自分が体験するはめになったとき、まず従来の説明に違和感を持ちました。外側から見て解説される症状と内側から観察する症状には、かなりのズレがあったのです。この本は、「なぜこんなことが起こっているのか」をしつこく追い求めた観察記であり、牢獄ありジャンルありの冒険記であり、その症状のままで健やかに生きるための明るい思索的エッセイです。

居るのはつらいよ

ケアとセラピーについての覚書

東畑開人

大佛次郎論壇賞
紀伊國屋じんぶん大賞1位

「ただ居るだけ」vs.「それでいいのか？」

心理学博士号を取ったけれど仕事がない……と思った
ら、ありました、沖繩に。「セラピーをするんだ！」
と勇躍飛び込んだそのダイケア施設は、あらゆる価値
が反転する「ふしぎの国」だった——。ケアとセラ
ピーの価値について究極まで考え抜かれた本書は、涙
あり笑いあり出血（！）ありの、大感動スペクタクル
学術書です！



A5 頁360 2019年
定価：本体2,000円+税
[ISBN 978-4-260-03885-0]

●印象的な一節

時計を見ると、まだ勤務が始まって、一時間も経っていない。愕然とする。「なんてことだ！座っているのがこんなに難しいとは！」

▼p.39

著者

東畑開人氏

からのメッセージ



この本は僕の青春物語です。夢見る青年が現実と出会って、完膚なきまでに打ちのめされるお話だからです。そのほろ苦い、いや苦杯を一気飲みするようなきつい敗北を経て、僕は友情と知を得ました。ですから、沖繩のダイケアで人生の一時期を共に生きたメンバーさんとスタッフの物語、そしてケアとセラピーという心の援助をめぐる中核的問題についての僕なりの答えが、この本になりました。

在宅無限大

訪問看護師がみた生と死

村上靖彦

「普通に死ぬ」を再発明する

病院によって大きく変えられた「死」は、いま再びその姿を変えている。先端医療が組み込まれた「家」という未曾有の環境のなかで、訪問看護師たちが地道に「再発明」したもののなかで、著者は並外れた知的肺活量で、訪問看護師の語りを生け捕りにし、看護が本来持っているポテンシャルを言語化する。



A5 頁264 2018年
定価：本体2,000円＋税
[ISBN978-4-260-03827-0]

● 印象的な一節

快の場であることが自明でなくなった家においてもう一度快を生み出す運動、それが在宅医療なのだ。

▼ p.36



著者

村上靖彦氏

からのメッセージ

死が訪問看護師によって再発明されつつあります。在宅医療においては死は孤独ではなく、親しい人との共同の経験です。訪問看護は（死を通して）むしろ患者の生きることを浮き上がらせます。快適さのなかで患者が自分自身を取り戻すこと、願いごとを通して家族とのつながりをつくり直すこと、運命を引き受けること、これらを支える存在として訪問看護師は登場します。人が生きること、家族とともにあることの本来の姿を、看護師たちは教えてくれるかのようです。

異なり記念日

齋藤陽道

手と目で「見る」とはどういうことか

「聞こえる家族」に生まれたらう者の僕と、「ろう家族」に生まれたらう者の妻。ふたりの間に、聞こえる子どもがやってきた。身体と文化を異にする3人は、言葉の前にまなざしを交わし、慰めの前に手触りを送る。見る、聞く、話す、触れることの喜びとともに。ケアが発生する現場からの感動的な実況報告。



A5 頁240 2018年
定価：本体2,000円＋税
[ISBN978-4-260-03629-0]

●印象的な一節

「異なることがうれしい」と、まずはそう言い切ってしまったから物事を始めようと思っている、ぼくは。

▼ p.218

著者
齋藤陽道氏
からのメッセージ



人と「異なること」を恐れていました。周りの人とズレた行動をしないようにと、感情や願いを押し殺してきました。だれも見向きもしない路傍の石に撞れていました。でもやっばり、ぼくは身も心もぬらぬら揺れる人間でした。子どもと過ごす日々、まなざしや体温を感じる日々を重ねるうち、「異なり」は悲哀に満ちた冷たいだけのものではないと気づきました。詩情や覚悟、やわらかく強いアレを育む源でもあると知りました。まなみが、樹さんが、手話の世界が、教えてくれた気づきを書きました。よろしくどうぞ。

どもる体

伊藤亜紗

しゃべれるほうが、変。

話そうとすると最初の言葉を繰り返してしまおう（＝連発という名のバグ）。それを避けようとすると言葉自体が出なくなる（＝難発という名のフリーズ）。吃音とは、言葉が肉体に拒否されている状態だ。しかし、なぜ歌っているときにはどもらない？徹底した観察とインタビューで吃音という「謎」に迫った、誰も見たことのない身体論！



A5 頁264 2018年
定価：本体2,000円＋税
[ISBN978-4-260-03636-8]

●印象的な一節
いま考えると、あの遊びの快樂は、勢いづいた体がコントロールを外れて自分のものでなくなる、そのぎりぎりの境目を楽しんでいたのだと思います。

▼p.14

著者
伊藤亜紗氏
からのメッセージ



読んでくださった方から、よく「私も吃音かもしれないです」という感想をいただきます。その人が本当に吃音かどうかは分かりませんが、ふだん当たり前のようにやっている「しゃべる」という行為は、実はとても複雑で、繊細で、曖昧な、出たところ勝負の連続です。そんなアワアワした体の本音を語り合う言葉をつくりたかった。吃音を単なる発語の障害ととらえる視点を離れ、「ままならない体とともに生きるとはどういうことか」という普遍的な問いに向かいました。

中動態の世界

意志と責任の考古学

國分功一郎

小林秀雄賞
紀伊國屋じんぶん大賞1位

失われた「態」を求めて

強制はないが自発的でもなく、自発的ではないが同意している。そうした曖昧な事態はなぜ言葉にしにくいのか？そもそも、なぜそれが「曖昧」にしか感じられないのか？語る言葉がないからか？それ以前に、私たちの思考を条件付けている「文法」の問題なのか？ケア論にかつてないパススペクティヴを切り開く画期的論考！



A5 頁344 2017年
定価：本体2,000円＋税
[ISBN978-4-260-03157-8]



著者
國分功一郎氏
からのメッセージ

この本は古代の言語の文法を論じた哲学書ですので、いろいろな人から何度も、「なんで医学書院から？」と聞かれました。でも、読んでいただければ、この本がどうして医学やケアと関わっているのか分かってもらえると思います。そもそも依存症との出会いが僕をこの本の執筆へと駆り立てたのです。何でもかんでも能動と受動に分類してしまう僕らの考え方がどれほど貧しいものであるか——この想いがこの本の出发点にあります。

● 印象的な一節

アレントが取り上げる事例というのは、銃で脅された人物が、自分の手でポケットからお金を取り出して、それを相手に渡すというものである。これは一般に、カツアゲと呼ばれる事例に相当する。

▼ p.142

介護するからだ

細馬宏通

あの人はなぜ「できる」のか？

目利きで知られる人間行動学者が、ベテランワーカーの神対応をビデオで分析してみると……そこには言語以前に「かしこい身体」があった！ケアの現場が、ありえないほど複雑な相互作用の場であることが分かる「驚き」と「発見」の書。マニュアルがなぜ現場で役に立たないのか、どうすればうまく行くのかがよく分かります。



A5 頁288 2016年
定価：本体2,000円＋税
[ISBN978-4-260-02802-8]

著者

細馬宏通氏
からのメッセージ



研究者は自分の苦手なことを専門にする、という説があります。わたしは介護に関してはまさにそれが当てはまります。自分ではどうにもならないことを職員さんにはすいすいできてしまおう。その理解しがたいギャップを理解すべく、とにかく介護施設で見て聞いて触れて、言葉でごりごり考えていったら、介護は相互行為だと気づきました。そしてわたしは未だに介護動作がうまくありません。うまくなったら考えなくなりそうです。

● 印象的な一節

実際にその誰かのいる場所に立ち、その人と同ト姿勢をとる。あまりにも簡単な方法だけれど、それは思いがけない気づきを生むのである。

▼ p.125

漢方水先案内

医学の東へ

津田篤太郎

漢方だったら、なんとかならんじやないか？

原因がはっきりせず成果もあがらない「ベタなぎ漂流」に追い込まれたらどうするか。病気をたたくより、病気に對抗する生体のパターンは決まっているならば、「生体をアシストする」という方法があるじやないか！万策尽きた最先端の臨床医がたどり着いたのは、キウアとケアの合流地点だった。それが漢方。



A5 頁238 2015年
定価：本体2,000円+税
[ISBN978-4-260-02124-1]

●印象的な一節

まったく歪みのない状態、過不足なくバランスのとれた状態は病気から最も遠い状態ですが、そこでじっと留まっているのは、実は死んでいるのと同じです。

▼ p.184



著者

津田篤太郎氏

からのメッセージ

漢方はエビデンスがない、効かない、インチキだ、と言われ続け、「いつたい何のため漢方を学ぶんだっけ？」——これが本書を書く一つの大きな動機でした。漢方薬を出せば、漢方〴〵なのだろうか。漢方薬が効けば、漢方〴〵なのだろうか。いや、違う。「病が治ることが病者にとって何を意味するのか？」と問題の枠組み自体をひっくり返すことに、いま漢方を学ぶ意義がありました。「治ればよい」を、もう一度問う本になればと思います。

クレイジー・イン・ジャパン

べてるの家のエスノグラフィ「DVD付」

中村かれん

日本の端の、世界の真ん中

インドネシアで生まれ、オーストラリアに育ち、アメリカで映像人類学者となり、今はUCバークレーで教える若き俊英が、べてるの家に辿り着いた——。7か月以上も住み込んだ彼女の目に映ったべてるの家は、果たしてユートピアかデイストピアか？ べてるの「感動」と「変貌」を、かつてない文脈で発見した傑作エスノグラフィ。付録DVD「Batal」（約40分）は必見の名作！



A5 頁296+DVD40分
2014年
定価：本体2,200円+税
[ISBN978-4-260-02058-9]

● 印象的な一節

このときまで川村は目を閉じていたが、頭をゆっくりと上下に動かしてはじめた。会議のテーブルを視線が行き交い、誰かがクスクス笑った（私だったかもしれない）。

▼ p.122

著者
中村かれん 氏
からのメッセージ



日本で話題になってきているべてるの家を世界に紹介したくて、浦河に行きました。日本をはじめ米国の精神障害者の現場を比較研究する人類学者として私は、この本を、精神障害について深く考えたことがない人や精神障害を経験した人、そしてべてるの友人たちのためにも書きました。同時にこの本が私自身のために書かれたことも認めなければなりません。べてるに住み、自分と対峙しながら本を書く作業はつらいものでしたが、それは私自身を発見していく道程でもありました。



A5 頁272 2014年
定価：本体2,000円＋税
[ISBN978-4-260-02012-1]

カウンセラーは何を見ているか

信田さよ子

「強制」と「自己選択」を両立させる。それがプロ

「聞く力」はもちろん大切。しかしプロなら、あなたも素人のように好奇心を全開にして、相手を「見る」ことが必要だ。では著者は何をどう見ているのか？ 若き日の精神科病院体験を経て、開業カウンセラーの第一人者になった著者が、身体でつかみ取った「見て」「聞いて」「引き受けて」「踏み込む」ノウハウを一挙公開！

●印象的な一節

どちらに傾くかという不安定さの中に二人いること。「…」もしかすると対等という美しい名前で呼ばれるのはこういう瞬間なのではないかと感じるのである。



著者
信田さよ子氏
からのメッセージ

挑発的な表紙の女性はじつとあなたを見ている。表紙をめくると「傾聴・共感は不要」どころか、「自己選択」を利用した強制」といった記述さえある。心理という言葉は出てこない。体験から紡ぎ出し、思索を深め、普遍の後ろ髪をつかもうとする至福の過程を本書前半で共有していただくと、後半の第2部では私と一緒に見る。快樂が味わえる。一粒で二度おいしいサービスマ満点の本書をぜひ手に取ってもらいたい。

坂口恭平 躁鬱日記

坂口恭平

僕は治ることを諦めて、「坂口恭平」を操縦することにした

ベストセラー『独立国家のつくりかた』などで注目を浴びる坂口恭平。しかしそのきらびやかな才能の奔出は、「躁のなせる業」でもある。鬱期には強固な自殺願望に苛まれ外出もおぼつかない。試行錯誤の末、彼は「意のままにならない坂口恭平をみんなで操縦する」という方針に転換した。その成果やいかに！



A5 頁298 2013年
定価：本体1,800円＋税
[ISBN978-4-260-01945-3]

● 印象的な一節

妻であるフーは、僕が躁だろうが鬱だろうが同じように対応する。「…僕が死にたいときだけ、「嫌だ」と強く言う。

▼ p.273

著者

坂口恭平 氏

からのメッセージ



僕が精神の赴くままに書いたまとまりのない日記を読んで、医学書院の担当編集の方は、イヒヒ面白い、と笑いました。恐ろしい人です。それにつられて僕は一番見せたくないはずの鬱期の酷い文も送ってしまいました。すると氏は、イヒヒ面白くなさすぎる、と笑いました。でもなぜか僕も笑ってしまいました。躁鬱日記はそんな風通しの良い気持ち悪さが詰まっている僕と家族との日々の記録です。読んでみてね。イヒヒ。

摘便とお花見

看護の語りの現象学

村上靖彦

誰も看護師を知らない

とるにたらない日常を、看護師はなぜ目に焼き付けようとするのか——。ケアという「人間の可能性の限界」を拡張する営みに吸い寄せられた気鋭の現象学者は、共感あふれるインタビューとビデオカメラのような冷徹な分析によって、不思議な時間構造に満ちたその姿をあぶり出した。看護行為の言語化に資する驚愕の一冊。



A5 頁416 2013年
定価：本体2,000円＋税
[ISBN978-4-260-01861-6]

●印象的な一節

Cさんのお話をうかがっているまさにその瞬間に、プルーストがなぜあれほど想起に価値を置いていたのかということの意味がようやく実感され、家に帰ってすぐ読み始めた。▼p.234



著者

村上靖彦氏

からのメッセージ

しばしば不条理な仕方で襲ってくる病や障害、死を前にする患者と家族を、生活において支える看護師たちに私は魅力を感じつつづけています。本書では老年のがん患者、在宅で看取りを迎える働き盛りのがん患者、小児がん病棟の子どもへの看護が話題になります。受け入れがたい困難な場面に患者や家族が陥ったときに、そこで（一人ひとり違った仕方で）一緒にたたずんでくれる存在としての看護師を描こうとしました。

当事者研究の研究

石原孝二 編

で、当事者研究って何？

専門職・研究者の間でも一般名称として使われるようになってきた「当事者研究」。それは、客観性を装った「科学研究」とも違うし、切々たる「自分語り」とも違うし、勇ましい「運動」とも違う。本書は哲学や教育学、あるいは科学論と交差させながら、自分の問題を他人事のように扱う、当事者研究の圧倒的な感染力の秘密を探る。



A5 頁320 2013年
定価：本体2,000円＋税
[ISBN978-4-260-01773-2]

● 印象的な一節
専門知と対立するのではなく、しかし、その意味をずらしていく当事者研究の知のあり方は、これまでになかった知のあり方を提示している。

▼ p.4

編者
石原孝二氏
からのメッセージ

さまざまな問題や苦悩をかかえる当事者による「当事者研究」は、専門家による研究とは異なります。でも、専門家による研究だけが「研究」ではありません。むしろ当事者研究こそが「研究」本来の姿だと言えるかもしれません。当事者研究は、「研究」という実践によって当事者自身のあり方や意識を変え、「研究」とは何なのかを専門家に問いかけるものです。そうした当事者研究の魅力を解き明かすことを目的として、この本を編集しました。



弱いロボット

岡田美智男

「とりあえずの一步」を支えるために

ゴミを見つければ拾えない、雑談はするけれど何
を言っているかわからない……そんな不思議な「引き
算のロボット」を作り続けるロボット学者がいる。彼
の眼には、挨拶をしたり、おしゃべりをしたり、歩い
たりの「なにげない行為」に潜む奇跡が見える。
他力本願なロボットを通して、ケアをすることの意味
を深いところで肯定してくれる異色作！



A5 頁224 2012年
定価：本体2,000円＋税
[ISBN978-4-260-01673-5]

● 印象的な一節

個人に能力をつけてから、という考え方自体が、逆に個人の能力を伸ばすチャンスを奪っているのかもしれないよ。

▼ p.112



著者

岡田美智男氏

からのメッセージ

「ケアをひらく」シリーズに著者として参加でき、とても光栄です。ただ校正の段階になって、「ケア」という言葉が本文中にまったく使われていないことに気づきました。初期の草稿ではいろいろ「ケア」に言及したはずが、カットカットの連続で……、しまいには一つも残っていなかったというわけです（笑）。まあ、「ケア」ということばを使わず、ケアの深層に迫る！」なんてコピーもいいなあ、と。

ソローニユの森

田村尚子

ケアの感触、曖昧な日常

本書の舞台は、思想家フェリックス・ガタリが終生関わったことで知られるラ・ボルド精神病院。写真家・田村尚子氏の震える眼は、この伝説の病院に流れる「緩やかな時間と曖昧な日常」を掬い出す。医療と生活の境界を大胆に横断して注目を集める本シリーズは、田村氏の視線に注目！ルポやドキュメンタリーとは一線を画した、ページをめくる喜びに満ちた刮目の写真集。



B5変型 頁132 2012年
定価：本体2,600円＋税
[ISBN978-4-260-01662-9]

● 印象的な一節

細かいことが気になって仕方なく、毎朝起きると自分の前髪を少しずつ切っていた。実際この後、パリに帰ったときには右肩上がりのななめになった髪型になっていた。

▼ 006

著者
田村尚子氏
からのメッセージ

ジャン・ウリ院長との京都での出会いがきっかけで、フランスのラ・ボルド病院にときおり出掛けては、患者さんと過ごしていました。そこで見つめてきた時間の流れを、写真と短い文章に凝縮させることができたように思います。長く丁寧なやりとりを経て出来上がったこの写真集の存在そのものが、病院の中で行われている様々なやりとりや「場の空気感」を具現化できる、もうひとつの扉になったら嬉しいです。



驚きの介護民俗学

六車由実

日本医学ジャーナリスト協会賞

語りの森へ

『神、人を喰う』でサントリー学芸賞を受賞した気鋭の民俗学者は、あるとき大学をやめ、老人ホームで働きはじめた。そこで出会った「忘れられた日本人」たちの語りに身を委ねていると、やがて目の前に新しい世界が開けてきた――。「事実を聞く」という行為がなぜ人を力づけるのか。聞き書きの圧倒的な可能性を活写し、高齢者ケアを革新する話題の書。



A5 頁244 2012年
定価：本体2,000円＋税
[ISBN978-4-260-01549-3]

●印象的な一節

美智子さんはそんな私を覗き込んで、「あんたが泣くことじゃないよ」と少し呆れながらも、さらに話を続けた。

▼p.180



著者

六車由実氏

からのメッセージ

大学を辞めて、高齢者介護の世界にとびこんだ私は、介護現場で驚きの光景を目の当たりにしました。「生き地獄」と言って嘆いているおじいちゃんや、目を輝かせて馬喰の話をしてくれたり、認知症のおばあちゃんが、娘時代に村々をまわる蚕の鑑別嬢という仕事をしていたことを語ってくれたり。そのお年寄りたちの魅力的な語りに、民俗研究者の心は驚嘆みにされました。介護現場は想像以上に大変ですが、民俗学的思考と方法でお年寄りに向き合ったとき、そこには思わぬワンダーランドが広がります。ぜひ読んでみてください。

その後の不自由

「嵐」のあとを生きる人たち

上岡陽江 十大嶋栄子

「ちょっと寂しい」がちょうどいい

暴力などトラウマティックな事件があった「その後」も、専門家がやって来て去っていった「その後」も、当事者たちの生は続く。しかし彼らはなぜ日常そのものにつまづいてしまうのか。なぜ援助者を振り回してしまうのか。そんな「不思議な人たち」の生を、薬物依存の当事者が身を削って書き記した当事者研究の最前線。



A5 頁272 2010年
定価：本体2,000円＋税
[ISBN978-4-260-01187-7]

●印象的な一節

手首を切っているような人には、日常がないのです。「普通」というのは彼女たちにとって抽象的なものでしかないから、「実際の普通はこういうものだよ」といって、普通を具体化して
いってほしい。

▼ p.167

著者

上岡陽江氏

からのメッセージ

この20年間、私は初めの10年は怒ってる

か、泣いてるか、無力感でうずくまってる

かだった。10年を過ぎるころから、生き延

びた仲間の情報が聞かれるようになり、「私たちは何を
してきたのか」がやっと分かるようになったのだ。

仲間たちに何が起きているのか、どう生き延びていく
のか、何が足りないのか。それを思い切って書いてみ
ました。



リハビリの夜

熊谷晋一郎

新潮ドキュメント賞

痛いの困る

現役の小児科医にして脳性まひ当事者である著者は、あるとき「健常な動き」を目指すリハビリを諦めた。そして、「他者」や「モノ」との身体接触をたよりに官能的にみずからの運動を立ち上げてきた。リハビリキャンプでの過酷で耽美な体験、初めて電動車いすに乗ったときのめくるめく感覚などを、全身全霊で語り尽くした驚愕の書。



A5 頁264 2009年
定価：本体2,000円+税
[ISBN978-4-260-01004-7]

●印象的な一節

敗北直前の強い焦りはやがて、敗北が決まったときの悔しくて悲しい思いに変わっていく。その、焦燥から抑うつへと移っていく感情の一部始終に、ひそやかな官能が重層している。

▼p.16



著者

熊谷晋一郎氏

からのメッセージ

リハビリで健常者の動きを押し付けられ続けているうちに、いつのまにか自分の中に産み落とされていた不思議な官能のモチーフがあつて、それは私にとって大きな謎であり、同時に隠れ家でもあったのですが、その謎解きをしようというつもりでこの本を書きました。書いているうちに、芋づる式に、リハビリのこととか、一人暮らしのこととか、仕事のこともかにも触れざるを得なくなつて、やがて「動き」というものの自体について考えるようになっていきました。そんな本になっています。

逝かない身体

A L S 的日常生活を生きる

川口有美子

大宅壮一ノンフィクション賞

即物的に、植物的に

言葉と動きを封じられたALS患者の意思は、身体から探るしかない。ロックトイン・シンドロームを経て亡くなった著者の母を支えたのは、「同情より人工呼吸器」「傾聴より身体の微調整」という即物的な身体ケアだった。かつてない微細なレンズでケアの世界を写し取った著者は、重力に抗して生き続けた母の「植物的な生」を身体ごと肯定する。



A5 頁276 2009年
定価：本体2,000円＋税
[ISBN978-4-260-01003-0]

●印象的な一節
患者を一方的に哀れむのをやめて、ただ一緒にいられることを尊び、その魂の器である身体を温室に見立てて、蘭の花を育てるように大事に守ればよいのである。

▼ p.200

著者
川口有美子氏
からのメッセージ



自分の体験を書いて、「ケアをひらく」の一冊にしていただけで、内心本当にいいのかな？ 私たちがしてきた介護はフツウではない体験だから、一般の人にわかってもらえるのだろうかとも思っていた。ところが「個人の闘病記だが、普遍化できる」との感想をたくさんの人々にいただいた。個人の病いの体験を、ケアとは関係ない暮らしをしている人々と分かち合えるのが、このシリーズの素敵なところだ。

技法以前

べてるの家のつくりかた

向谷地生良

私は何をしてこなかったか

「幻覚&妄想大会」をはじめとする旋破りのイベントはどんな思考回路から生まれたのか？ べてるの家のような場をつくるには、専門家はどう振る舞えばよいのか？ 「当事者の時代」に専門家が〈できること〉と〈してはいけないこと〉を明らかにした、かつてない実践的「非」援助論。



A5 頁252 2009年
定価：本体2,000円+税
[ISBN978-4-260-00954-6]

● 印象的な一節

「だれかがそばにいる感覚」は、一対一でじっくりと対面する構造からだけでは生まれにくいと私は思っている。この感覚は、限りなく「量的」なものだからである。

▼ p.103

著者

向谷地生良氏

からのメッセージ



精神医療の現場に身を置きながら、さまざまな援助技法の流行と廃れを見てきました。そのなかで、ソーシャルワーカーとして、まず困難が起きている現場に足を運び、そこに身を置きながら「私だったらどう生きるか」という問いを基本としながら仕事をしてきました。その経験から生まれたのが本書です。大変な苦勞を生き抜いてきたメンバー一人ひとりによって「書かされた」本です。専門家以上に、当事者からの支持がうれしいですね。

コーダの世界

手話の文化と声の文化

澁谷智子

生まれながらのバイリンガル？

コーダとは、聞こえない親をもつ聞こえる子どもたち。「ろう文化」と「聴文化」のハイブリッドである彼らの日常は、驚きに満ちている。親が振り向いてから泣く赤ちゃん？目をじっと見すぎて誤解されてしまう若い女性？——コーダの日常を生き生きと描き、異文化交流の核心に迫る、刮目のコミュニケーション論。



A5 頁248 2009年
定価：本体2,000円＋税
[ISBN978-4-260-00953-9]

● 印象的な一節

コーダの頭の中は、聴者とは違う。たぶん、頭を割って中を覗いてみたら、きっとテレビみたいに動画になっているんだろう。

▼ p.43

著者
澁谷智子氏
からのメッセージ



多くの方に手話の魅力とコーダ家庭の親子のやりとりを知っていただけるように、そして、コーダや聞こえない親には、自分に重なるところがあると実感していただけるようにと思つて書きました。手話を使う人の間では、席をはずすときには「トイレ」などのようにその理由を告げるのがマナーだけれど、聞こえる聴者の世界では、すつといなくなつてもまわりが察して了解する。そんなちょっとした文化の違いを、コーダの経験を通して発見していただけると嬉しいです。

ニーズ中心の福祉社会へ

当事者主権の次世代福祉戦略

上野千鶴子・中西正司 編

社会改革のためのデザイン！ ビジョン！！ アクション!!!

「こうあってほしい」という構想力をもったとき、人はニーズを知り、当事者になる。この当事者ニーズこそが次世代福祉のキーワードだと考える研究者とアクティビストたちが、安心して「おひとりさまの老後」を迎えられる社会を目指して、具体的シナリオを提示する。時代は次の一步へ。



A5 頁296 2008年
定価：本体2,200円＋税
[ISBN978-4-260-00643-9]

● 印象的な一節

専門家とは、当事者ニーズを事後的にオーソライズする権威を持った第三者にすぎず、ニーズを生成する主体ではない。

▼ p.23



編者
上野千鶴子氏
からのメッセージ

中西・上野の共著『当事者主権』から5年。そろそろ「次の一手」を考える時期が来た。それなら、といまの日本で考え得る最高のメンバーを集めようと思った。インテンシブな研究会を何度か持つてつくった本書は、ただの寄せ集めではない。帯に「デザイン、ビジョン、アクション」と書いたのはわたし。これさえ読めば当事者主権の福祉社会をつくるための設計図（デザイン）も、その見通し（ビジョン）も、どうすればよいかの道筋（アクション）も、ぜんぶわかる！

発達障害当事者研究

ゆっくりていねいにつなごうたい

綾屋紗月十熊谷晋一郎

あふれる刺激、ほどける私

なぜプールサイドを歩けないのか、なぜ空腹がわからないのか、なぜ看板が話しかけてくるのか、なぜ月夜の晩は身体がざわめくのか――。外部からは「感覚過敏」「こだわりが強い」としか見えない発達障害の世界を、アスペルガー症候群当事者が、脳性まひの共著者とゆっくりていねいに探った画期的研究。「過剰」の苦しみは心ではなく身体に来る！



A5 頁228 2008年
定価：本体2,000円＋税
[ISBN978-4-260-00725-2]

●印象的な一節

月光が目に与える刺激は、好きなヒトやモノを見たときのように、さくさくとドキッとする感覚がはるかに大きくなったものであり、さらに、うっとりとするような感覚や、心身ともに丸裸にされるような解放感をもたらす。

▼ p.182

著者
綾屋紗月氏
からのメッセージ



自分でも分からずに手に負えなかった、自分のことが、当事者研究というかたちで理論になっていく。その過程そのものが、私にとってもケアとなった気がします。



A5 頁240 2007年
定価：本体2,000円+税
[ISBN978-4-260-00457-2]

こんなたまご 私はどうしてきたか

中井久夫

「希望を失わない」とはどういうことか

初めて患者さんと出会ったとき、暴力をふるわれそうになったとき、「回復に耐える力」がなさそうなとき、私はどんな言葉をかけ、どう振る舞ってきたか——。当代きつての臨床家であり達意の文章家として知られる著者渾身の一冊。ここまで具体的に美しいアドバイスが、かつてあっただろうか！

● 印象的な一節

治療は山に登ることではなく、加速度がつかないようにしながら、山から下りることなのです。そして戻るところは平凡な里です。

▼ p.190



著者
中井久夫 氏
からのメッセージ

有馬病院で月に一回お話ししたら、医学書院の白石さんが現れて、気が付いたら本になっていました。

ケアってなんだろう

小澤 勲 編著

「技術としてのやさしさ」を探る七人との対話

「ケアの境界」に在る専門家、作家、若手研究者らが、精神科医・小澤勲氏に「ケアってなんだ？」と迫り聴く。「ほんのいつときでも憩える椅子を差し出す」のがケアだと小澤氏は言う。そう言い切れる人の強さとやさしさはどこから来るのか。感情労働が知的労働に変換されるスリリングな一瞬！

【対話者】田口ランディ（作家）、向谷地生良（べてるの家）、滝川一廣（精神科医）、瀬戸内寂庵（作家）、西川勝（看護／臨床哲学）、出口泰靖（社会学）、天田城介（社会学）。



A5 頁304 2006年
定価：本体2,000円＋税
[ISBN978-4-260-00266-0]

編集者

からのメッセージ

編者である小澤勲さんは、本書が刊行された2年半後、2008年11月に亡くなられた。享年70。著名人や若手研究者ら7人との対話からなるが、そのとき既にも期のがんと診断されていた。小澤さんの思い出を語るとき皆が口にするのが、「仏さんのような」笑顔である。あるいはその合間に見せるナイフのような鋭い視線である。対談のあいだ、その両極端をうつろう小澤さんの顔を見ているだけで飽きなかった。



● 印象的な一節

たしかに「受容」という言葉は、ケアのすべてを言い表している。しかし、すべてを言い表す言葉は、何も言っていないのと同じである。

▼ p.80

べてるの家の「当事者研究」

浦河べてるの家

研究？ ワクワクするなあ

前作『べてるの家の「非」援助論』で、精神医療領域を超えて大きな注目を浴びたべてるの家で、今度は「研究」がはじまった。どうにもならない自分を、他人事のように考えてみる。するとなぜか元気になる。不思議な研究。だから合言葉は、「自分自身で、共に」。そして、「無反省でいこう！」

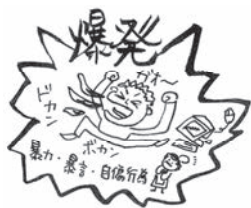


A5 頁310 2005年
定価：本体2,000円+税
[ISBN978-4-260-33388-7]

● 印象的な一節

〈くどうくどき〉の好物は「明治ブルガリアヨーグルト低糖(九二巴)」と「豚キムチチャーハン」だということがわかった。なぜわかったかというと、わたしと〈くどうくどき〉とは、食べ物の嗜好が一緒だからだ。

▼ p.05



著者

べてるの家

向谷地生良氏

からのメッセージ

いままで、研究対象であつた統合失調症などをかかえる当事者が、「自分のかかえる苦勞の研究」として研究に取り組み、発表した最初の本です。おもしろいのは、誰一人、同じ研究がないことです。科学的な根拠を明らかにし、一般化を図ろうとするいわゆる「研究者の研究」と、そこがいちばん違いますね。

ALS

不動の身体と息する機械

立岩真也

それでも生きたほうがよい、となぜ言えるのか

「質のわるい生」に代わるべきは、「質のよい生」であって、「美しい死」ではない。無意味な延命、死の受容などと唱える前にやるべきことがあり、呼びかけるべき声がある。「息ができれば苦しいではないか」という地点からの問いかけに、医療者はどう答えるのか。



A5 頁456 2004年
定価：本体2,800円＋税
[ISBN978-4-260-33377-1]

● 印象的な一節

個別の強い肯定の前に、否定するものがないなら、あるいは少ないなら、その方がよいのではないか。

▼ p.378

著者
立岩真也氏
からのメッセージ

（この本を執筆した動機）ひとつには、死ぬほど辛い病気・障害つてもものがあるのだろうかという、素朴な（？）疑問から。そして、すこし動くところを使ったりしてたくさんの方が本やホームページにもものを書いていることを知った。それを集めることに、しばらく、かなりはまっていました。



死と身体

コミュニケーションの磁場

内田 樹

人間は、死んだ者とも語り合うことができる

コミュニケーションは（ことば）の外にある。病んだ人の前に立つとすぐわかる。身体の声が聞こえるから。ときには死者でさえも語りかけてくるから——。「誰もが感じていて、誰も言わなかったことを、誰にでもわかるように語る」著者の、教科書には絶対出ていないコミュニケーション論。



A5 頁248 2004年
定価：本体2,000円＋税
[ISBN978-4-260-33366-5]

● 印象的な一節

座頭市はたぶん「速く」動いているのではありません。そうではなくて、「違う時間の流れ」に乗って動いている。

▼p.137

著者

内田 樹氏

からのメッセージ



うろ覚えですけど、時間意識について詰めて考えなくちゃいけないと思っていた時期があり（いまでも思っていますけど）、そのときに身体と時間について、思いつく限りのアイデアをおもちゃ箱をひっくり返したようにぶちまけたのがこの本だったような気がします。

見えないものと見えるもの

社交とアシストの障害学

石川 准

だから障害学はおもしろい

「看護は感情労働だ。しかし同時に、感情労働の破綻に惹かれる人にしかできない職業だ」——16歳で両眼の視力を失いながら、現在第一線の社会学者／プログラマーとして活躍する著者が、できないこと、弱いことがひらく可能性について考え尽くす話題作。「これなら人とながれる」と思えてきそうな、ちょっと楽しい障害学。



A5 頁272 2004年
定価：本体2,000円＋税
[ISBN978-4-260-33313-9]

● 印象的な一節

クール、知らんぷりが都会的でカッコいいという時代は去った。いまは人とかかわれる人がカッコいい時代ではないだろうか。

▼ p.94

著者

石川 准氏

からのメッセージ



ケアとはけっきょくはアシストと社交なのではないか。この本を書いたころの私はそう考えていました。若かった両親も年をとり、いまは月に一度実家に帰郷して家業を手伝う生活をしています。新しいフィールドワークです。

物語としてのケア

ナラティブ・アプローチの世界へ

野口裕二

「ナラティブ」の時代へ

「語り」や「物語」を意味する（ナラティブ）。人文諸科学で衝撃を与えつづけているこの言葉は、ついに臨床の風景さえ一変させた。臨床の物語論的転回はどこまで行くのか。「精神論vs.技術論」「主観主義vs.客観主義」「ケアvs.キュア」という二項対立の呪縛を超え、新しいケアがいま立ち上がる。



A5 頁220 2002年
定価：本体2,200円＋税
[ISBN978-4-260-33209-5]



著者
野口裕二氏
からのメッセージ

最初に書いた文章は（編集担当の）白石さんに駄目出されて、これはまずいと思ひ、とにかくわかりやすく書くことに徹しました。こうして、私の本の中でもっともわかりやすい本が出来上がりました。ケアが苦手な人間が、自分はなぜケアが苦手なのか、どういうケアなら自分にもできるのかを問いながら書いた本です。ケアが苦手な方にとくにお薦めします。

● 印象的な一節

セラピストが「問題」を特定しそれを解決しようとする姿勢を捨て去ったところで、「問題」は「問題」でなくなり始めたのである。

▼ p.104

べてるの家の「非」援助論

そのままがいいと思えるための25章

浦河べてるの家

それで順調！

「幻覚&妄想大会」「偏見・差別歓迎集会」という珍妙なイベント。「諦めが肝心」「安心してサボれる会社づくり」という脱力系キャッチフレーズ群。それでいて年商1億円、年間見学者1800人——医療福祉領域を超えて圧倒的な注目を浴びるべてるの家の、右肩下がりの援助論。



A5 頁264 2002年
定価：本体2,000円＋税
[ISBN978-4-260-33210-1]

● 印象的な一節

べてるでは「問題だらけ」がまん中にあってミーティングをする。そして「ミーティングなんかで解決しない」。そこがいいんだわ。

▼P.22イラスト

著者

べてるの家

向谷地生良氏

からのメッセージ

べてるの家が世に知られることになった記念碑的な本です。べてるの家が育んできた25の理念とメンバーの苦労の体験を重ね合わせてできた作品ですが、原稿集めとインタビューという膨大な作業を振り返ると、あの当時は「暇だったなあ」と思います。この本を哲学者の鷲田清一氏が『教養主義！』という本で取り上げてくださり、「300年に一度の逆転の思想」と紹介してくれています。



病んだ家族、散乱した室内

援助者にとっての不全感と困惑について

春日武彦

善意だけでは通用しない

一筋縄ではいかない家族の前で、われわれ援助者は何を頼りに仕事をすればいいのか。罪悪感や無力感にとられないためには、どんな「覚悟とテクニク」が必要なのか。空疎な建前論や偽善めいた原則論の一切を排し、「ああ、そうだったのか」と腑に落ちる発想に満ちた話題の書。



A5 頁228 2001年
定価：本体2,200円+税
[ISBN978-4-260-33154-8]

● 印象的な一節

わたしは民宿が苦手である。嫌なのである。



著者

春日武彦氏

からのメッセージ

この本を書いたころは、家族療法的なアプローチの大切さを痛感していた時期であり、また自身の生育史も含めて家族という密閉された小世界と世間との「すり合わせ」に失敗することの恐ろしさやグロテスクさにあらためて気づいていた時期でした。だから自分の心（医師としても個人としても）を整理しなおすといった意味が強く、この本を書かなかつたら人生に行き詰まっていた可能性が高い気がします。自己救済の書でもあるわけです。

あなたの知らない「家族」

遺された者の口からこぼれ落ちる13の物語

柳原清子

それはケアだろうか

幼子を亡くした親、夫を亡くした妻、母親を亡くした少女たちは、佇む看護師の前で、やがて「その人」のことを語り始める。人はなぜ語るだけで新たな力を得ることができるとだろう。ためらいがちな口と、傾けられた耳によって紡ぎだされた物語は、語る人を語り、聴く人を語り、誰も知らない家族を語る。



A5 頁204 2001年
定価：本体2,000円＋税
[ISBN978-4-260-33118-0]

著者

柳原清子氏

からのメッセージ



本書の当初のタイトルは、逝く人を看送る『家族の肖像』でした。病気で家族と死に別れた人々の語りをまとめて、ちょうど肖像画のように、その人と家族の像を浮き彫りにしてみたいと願って書いたものです。死別という不幸は同じでも、出来事にどう向き合い、どう日々を送っているかは家族によって千差万別でした。ただ、慟哭と悲哀と愛惜の念は痛いほど伝わってきたのをよく覚えていきます。

● 印象的な一節

春、遺族の小さな集まりに参加しての帰り道、「体験者じゃあなければ、ほんとうのつらさはわかりませんよね」とため息をつくように話しかけてきた老婦人がいた。

▼ p.05

感情と看護

人とのかわりを職業とすることの意味

武井麻子

看護師はなぜ疲れるのか

「巻き込まれずに共感せよ」「怒ってはいけない!」「うんざりするな!!」——看護は肉体力労働でも頭脳労働でもあるが、なにより感情労働だ。どう感じるべきかが強制され、やがて自分の気持ちさえ見えなくなってくる。隠され、眨められ、ないものとされてきた〈感情〉をキーワードに、「看護とは何か」を縦横に論じた記念碑的論考。



A5 頁284 2001年
定価：本体2,400円+税
[ISBN978-4-260-33117-3]

●印象的な一節

看護のなかでもっとも光の当てられてこなかった領域、それが感情の領域です。

「看護師だって人間だ」ということを、ぜひ伝ええたかったのです。これまであまり触れられていないことだったので、反発があるのではないかとヒヤヒヤしていましたが、肯定的な反応の大きさと広がり逆になりました。ひとを相手にする仕事についている人には、看護でなくても、たとえば家庭の主婦でも思い当たることがあるのではないかと思います。読んでくださった多くの方々から、「ありのままの自分でいいんだ」「生きやすくなった」と言われました。



著者
武井麻子氏
からのメッセージ

気持ちのいい看護

宮子あずさ

患者さんが気持ちいいと、看護師も気持ちいい、か？

「これまであえて避けてきた部分に踏み込んで、看護について言語化したい」という著者の意欲作。〈看護を語る〉ブームへの違和感を語り、看護師はなぜ尊大に見えるのかを考察し、専門性志向の底の浅さを喝破する。「自分のためにも看護することの意味を探りたかった」——今度の宮子はちよつと違うぞ。夜勤明けの頭で考えた「アケのケア論」だ！



A5 頁220 2000年
定価：本体2,100円＋税
[ISBN978-4-260-33088-6]

● 印象的な一節

「気持ちのいい看護」を探るためには、表面的な和合をあえて乱してでも、看護する側とされる側がそれぞれの立場から、本当のことを言ったほうがいい。

▼ p.6

著者

宮子あずさ氏

からのメッセージ



30代半ばの、一番しんどい年代に書いた本です。いま思うと、敵は過剰な自意識でした。どうにも行き詰まって書けなくなったときに父が亡くなり、ふと力が抜けたのを覚えています。そのことを書いたのが、長いあとがきです。いま読み返しても、泣けるな。

ケア学

越境するケアへ

広井良典

ケアの多様性を一望する

どの学問分野の小さな窓から見ても、その姿はいつもフレームをはみ出している——。医学・看護学・社会福祉学・哲学・宗教学・経済・制度等々のタテワリ性をとことん排し、積極的に「越境」することなしにケアの豊かさをとらえられないと考える著者の刺激に満ちた論考。時代は、境界線引きからクロスオーバーへ。



A5 頁280 2000年
定価：本体2,300円+税
[ISBN978-4-260-33087-9]

● 印象的な一節

「ケア」というテーマで考えていくと、自分のマージナルさ（境界性）がもっとも強く表れてしまう感じがする。

▼ p.263



著者
広井良典氏
からのメッセージ

私はこの本の前に「ケアを問いなおす」という本を出していたが、そのときベースにあったケアを「一対一」の関係としてとらえる捕らえ方に限界を感じ、そこから何とか抜け出したいと思っていた。そこで浮かび上がったのが「コミュニティ」や「自然」（とのつながり）という方向である。この『ケア学』ではそうした若干の素描を行っている。まだ本当の意味でのゴールに到達できていないが、そうしたケアをめぐる困難さのプロセスの一端はわずかなりとも示しているだろう。

開かれた対話と未来 今この瞬間に他者を思いやる
著 ヤーコ・セイツクラ トトム・アーンキル 監訳 斎藤 環

「対話が目的」の対話? 「未来を思い出す」対話? この不思議な設定が、いま対人援助の世界を大きく揺るがせている。なぜ話を聴くだけでこんなに効果があるのか。と。フーランドの創始者ふたりがオープンダイアローグの謎を解き、具体的方法をわかりやすく紹介した決定版、待望の翻訳! 巻頭には斎藤環氏による懇切丁寧な日本語解説(25頁)、巻末には日本ですぐに使える「対話実践のガイドライン」(28頁)を完全収載。

子どものための精神医学

滝川一廣

発達障害? アスペルガー症候群? 知的障害? 自閉症? ADHD? LD? ところでスペクトラムって何? 本書を読めば、錯綜する診断名を「認識と関係の座標軸」のもとに一望できるようになる。読めば分かるように書いてある、ありそうでなかった児童精神医学の基本書。子どもの(こころ)にかかわるすべての人へ。

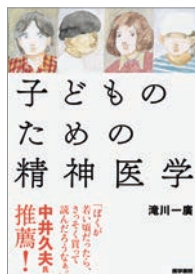
ユマニチュード入門

本田美和子 イヴ・ジネス トロゼット・マレスコッチ

認知症ケアの技法として注目を集める「ユマニチュード」。攻撃的になったり、徘徊するお年寄りを、こちらの世界に戻す様子を指して「魔法のような」とも称される。しかし、これは伝達可能な《技術》なのだ。そこには精神論でもマニュアルでもないコツがある。開発者と日本の臨床家たちが協力してつくり上げた決定版入門書!



A5 頁148 2014年
定価: 本体2,000円+税
[ISBN978-4-260-02028-2]



A5 頁464 2017年
定価: 本体2,500円+税
[ISBN978-4-260-03037-3]



A5 頁376 2019年
定価: 本体2,700円+税
[ISBN978-4-260-03956-7]



医学書院

〒113-8719 東京都文京区本郷1-28-23 <http://www.igaku-shoin.co.jp>
〔販売・PR部〕E-mail: sd@igaku-shoin.co.jp TEL: 03-3817-5650 FAX: 03-3815-7804

書店名